

最近のトピックス

新潟大学歯学部附属病院小児歯科

外来におけるエプーリス21症例について

新潟大学歯学部小児歯科学教室

富 沢 美 恵 子 三 澤 正 平
有 波 昌 子 野 田 忠

エプーリスは歯肉に生じた良性現局性腫瘤を総括した臨床診断名であり、成人に多く10歳未満の小児には少ないと報告されている。

新潟大学歯学部附属病院小児歯科外来では、昭和54年の開設以来平成4年までに21例のエプーリスを経験したので、臨床病理学的に検討を行った。

年齢・性別分布：当科における発見時年齢は生後9か月から28歳までで、男児7例、女児14例と女児に多くみられた。歯列別にみると乳歯列期では9か月から5歳8か月までに11例、混合歯列期では6歳から13歳までの7例、永久歯列では13歳1例、成人2例の3例であった。

主訴：歯肉の腫瘤を訴えたものが9例で、その他は歯科治療時あるいは検診時に発見されたものが12例であった。

発見から来院までの期間：1か月以内2例、1～3か月2例、4～6か月4例、7～12か月2例、1年以上5例、自覚していないものが6例あった。

発生部位：上顎15例、下顎6例で、部位別では前歯部19例、小白歯・大白歯部にそれぞれ1例ずつあり、成人と同様上顎前歯部の頻度が高かった。

腫瘤の大きさ：すべて1cm以内の小さな腫瘍で4mm以下のものが9例、5～8mmが8例、9～10mmのものが4例であった。

形態および基底部の状態：形態は半球球状9例、楕円形11例、三角形1例で、基底部は有茎性12例、広基性7例、不明2例であった。

色調および表面の状態：色調は正常歯肉色を呈するもの7例、赤みを帯びていたもの8例、白色調のもの6例であった。表面の状態は平滑であったもの14例、不規則なもの6例、不明1例であった。

硬さ：弾性硬9例、弾性軟6例、不明6例であった。

隣接歯への影響：腫瘤による患部乳歯への影響は3例にみられ、乳歯の傾斜または転位が認められた。

誘因：8例については歯の萌出、誘導装置の唇側弧線、外傷、歯の動揺、口腔悪習癖などが誘因として考えられたが、多くは不明であった。

処置：1例は試験切除後自然消失したが、20例は局所麻酔下に切除術を行なった。再発例はなかった。

病理組織学的診断：2例は出生直後から気付いていた先天性エプーリスであったが、組織学的には平滑筋、筋性血管、神経束などの組織の増殖からなる平滑筋腫性過誤腫であった。他の19例の内訳は肉芽腫性エプーリス3例、肉芽腫性から線維性への移行型3例、線維性エプーリス12例、骨形成性エプーリス1例であった。

まとめ：今回のエプーリス症例は成人例に比しすべて1cm以下の小さな腫瘍であった。小児におけるエプーリスでは、今回試験切除後自然消失した症例もあり、歯の交換期における一時的な歯肉の膨隆などの存在も考えられ、処置法など成人とは異なる観点から観察していく必要があると思われる。

文 献

- 1) 三澤正平、富沢美恵子、野田 忠、鈴木 誠：乳歯列期におけるいわゆるエプーリス11症例の臨床病理学的観察。小児歯誌、(印刷中)

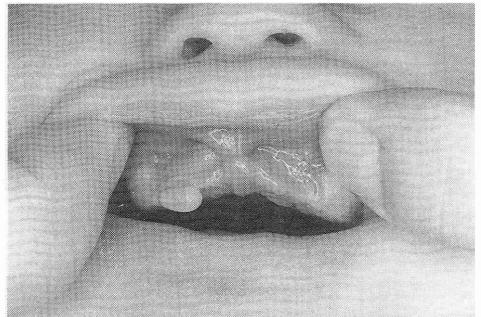


図1 11か月の女児にみられた骨形成性エプーリス

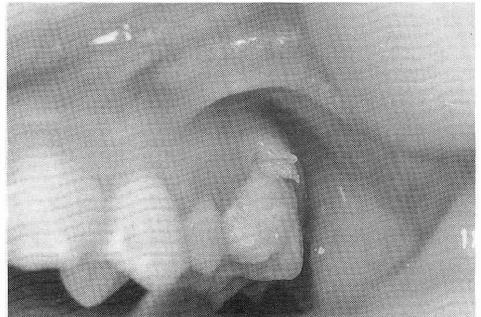


図2 13歳10か月の男児の左上顎第一大白歯部肉芽腫性エプーリス